

---

『 PHN （ 思想・人間・自然 ） 』 第53号

（ 2023年3月 ） （ web版 ）

---

.....

- ・ 「 日本国憲法施行75周年・沖縄復帰50周年記念 」

- ・ 2022年：ロシアによるウクライナ侵攻のさなかに考える

.....

- ・ 日本初のノーベル賞 物理学者・湯川秀樹 没後40年記念

- ・ 『湯川秀樹自選集』刊行50年記念

- ・ 「 今、〈湯川秀樹を読む〉 ということの意味 」

.....

# ・ 〈核廃絶と世界平和〉 の思想家

## としての 湯川秀樹

——理論物理学者の「創造的世界」、その軌跡を辿る

——【その二】・・・

—・「終戦からノーベル物理学賞受賞（1949）、そして  
国際理論物理学会議（1953・京都）まで」・—

和田耕作

---

---

.....

・【はじめに：2】・・・〔2023年2月24日〕

・2022年2月24日にロシアがウクライナに侵攻してから、ちょうど1年が過ぎたが、未だ停戦の見通しも困難な状況である。多数の人命を失い、焦土と化したウクライナの国土・・・

・国連は、ロシアの即時撤退などを決議した。G7など141ヶ国が賛成する一方、反対7ヶ国、棄権32ヶ国である。これが、世界

の現状である。

・戦争が長引けば長引くほど、その被害もまた甚大となる。それは、ウクライナだけでなく世界の損失、人類の悲劇にほかならない。

~~・戦争が長引けば長引くほど、その被害もまた甚大となる。それは、ウクライナだけでなく世界の損失、人類の悲劇にほかならない。~~

・80億人のなかに停戦へと仲裁する者はいないのか。和平へと仲裁する国はないのか。「分断の時代」といわれる今日、まさに現代世界文明は危機的な状態である。

・ひるがえって、日本はといえば、GDPの2%の防衛費を目指した。それは、世界第三位の軍事大国になるということを意味する。またそれは、戦後77年間、「戦争を放棄した平和憲法」を守ってきた日本の「平和主義」そのものを破壊する行為であると言わねばならない。

・我々は、いまこそ、あらためて湯川秀樹の「核廃絶と世界平和」の思想に学びつつ、それを活かしてゆく時ではないだろうか。

.....

・今回までは、いわば「思想家・湯川秀樹」の前史である。思想家としての湯川秀樹の本格的な解明は、次回以降となる。

.....

.....

・ 【主要参考文献】 . . . . .

・ ・〔順不同、「その一」「その二」以降の参考文献を含む〕 . .

- ・ 《A》『湯川秀樹選集』（全5巻、昭和30年～31年、甲鳥書林刊）
- ・ 《B》『湯川秀樹自選集』（全5巻、1971、朝日新聞社刊）
- ・ 《C》『湯川秀樹著作集』（全10巻、1989～1990、岩波書店刊）
- ・ 《D》雑誌『科学』（第1巻〔昭6〕～第17巻〔昭22〕、岩波書店刊）  
〔石原純「編輯主任」時代の『科学』〕
- ・ 《E》『小倉金之助著作集』（全8巻、1973～1975、勁草書房刊）
- ・ 《F》坂田昌一『物理学と方法 論集1』（昭和47年、岩波書店刊）
- ・ 《G》坂田昌一『科学者と社会 論集2』（昭和47年、岩波書店刊）
- ・ 《H》湯浅光朝編著『コンサイス科学年表』（1989、第二刷、三省堂刊）
- ・ 《I》『近代日本総合年表 第二版』（1984、岩波書店刊）
- ・ 《J》『科学史研究』第1号～第9号（昭和16～20年、日本科学史学会発行）
- ・ 《K》雑誌『科学』（第18巻〔昭23〕～第24巻〔昭29〕）、岩波書店刊）
- ・ 《L》雑誌『自然』（第1巻〔昭21〕～第9巻〔昭29〕）、中央公論社刊）

. . . . .

- ・ ①『湯川秀樹著作集』別巻、（1990、岩波書店刊）
- ・ ②坂田昌一『科学者と社会 論集2』（昭和47年、岩波書店刊）
- ・ ③小沼通二編『湯川秀樹日記1945—京都で記した戦中戦後』  
（2020、京都新聞出版センター刊）
- ・ ④小沼通二『湯川秀樹の戦争と平和——ノーベル賞科学者が  
遺した希望』（2020、岩波書店刊）

- ・ ⑤湯川秀樹『極微の世界』（昭和17年、岩波書店刊）
- ・ ⑥湯川秀樹『物理学に志して』（昭和19年、甲鳥書林刊）
- ・ ⑦政池明『荒勝文策と原子核物理学の黎明』（2018、京都大学学術出版  
会刊）
- ・ ⑧湯川秀樹『存在の理法』（昭和18年、岩波書店刊）
- ・ ⑨浜野高宏ほか著『原子の力を解放せよ——戦争に翻弄された  
核物理学者たち』（2021、集英社新書）
- ・ ⑩中谷宇吉郎『春草雑記』（昭和22年、生活社刊）
- ・ ⑪湯川秀樹『目に見えないもの』（昭和21年、甲文社刊）
- ・ ⑫湯川秀樹『自然と理性』（昭和22年、秋田屋刊）
- ・ ⑬湯川秀樹『科学と人間性』（昭和23年5月、国立書院刊）
- ・ ⑭湯川秀樹『物質観と世界観』（昭和23年8月、弘文堂刊）
- ・ ⑮湯川秀樹『原子と人間』（昭和23年12月、甲文社刊）
- ・ ⑯湯川秀樹『しばしの幸』（昭和29年、甲文社刊）
- ・ ⑰田中正『湯川秀樹とアインシュタイン』（2008、岩波書店）
- ・ ⑱小沼通二編『湯川秀樹日記 昭和9年：中間子論への道』  
(2007、朝日新聞社刊)
- ・ ⑲小倉金之助『戦時下の数学』（国民学術選書、昭和19年、創元社刊）
- ・ ⑳松宮哲夫『伝説の算数教科書〈緑表紙〉—塩野直道の考えたこと』  
(2007、岩波書店刊)
- ・ ㉑森口昌茂「戦時期京都帝国大学における緊急科学研究体制の  
実態とその背景について—海軍との関係を軸に—」（「東海の科学史」  
第14号、2021年4月、所収）
- ・ ㉒和田芳恵『筑摩書房の30年—1940-1970』（2011、筑摩書房刊）
- ・ ㉓湯浅光朝『解説・科学文化史年表』（1950、中央公論社刊）

- ・ ②④ 『仁科芳雄—伝記と回想』 (朝永振一郎・玉木英彦編、みすず書房、1952)
- ・ ②⑤ ジョン・ダワー 『増補版・敗北を抱きしめて』 (上、三浦陽一・高杉忠明訳、2004、岩波書店刊)
- ・ ②⑥ 田島英三 「理研のサイクロトロン」 (玉木英彦・江沢洋編『仁科芳雄』、みすず書房、1991、所収)
- ・ ②⑦ 「石原純年譜」〔石原紘筆〕、「科学随筆全集2」：『物理学者の眼』、昭和36年、学生社、所収)
- ・ ②⑧ 和田耕作 『石原純—科学と短歌の人生』 (2003、ナテック刊)
- ・ ②⑨ 『岩波新書の50年』 (岩波書店編集部編、1988、岩波書店刊)

.....

・ ・ 【その二】 .....

.....

・ 【1945年(昭和20年)】 ・ ・ ・ 【B：戦後】 .....

.....

・ 〈中谷宇吉郎〉 ・ 10月、「文芸春秋」に「原子爆弾雑話」を書く。

〔『春草雑記』昭和22年1月、生活社刊に収録。中谷：文献⑩〕

- ・ 【中谷「原子爆弾が今度の戦争に間に合うとは思っていなかった」】
- ・ 「ウラニウムの核分裂の発見から原子爆弾に到達するまでに、平時だったら30年とか50年とかの月日を要するだらうと考へるのが普通であ

る。実際のところ私なども、原子爆弾が今度の戦争に間に合はうとは思つていなかった。」

・「アメリカのことであるから、何百人の科学者を動員し、何千万円といふ研究費を使っているのかもしれないが、それにしても今度の戦争にすぐ間に合ふといふやうな生易しい仕事ではない筈である。・・・ところがそれが**まるで桁ちがひの数字であった**のである。「発見までには20億ドルを費し「6万5千を超える」技術作業員を擁した大工場の作業が、極秘裡に進められていようとは夢にも考へていなかったのである。」

・【「科学に無理解な関係官庁など」 = 「国力の不足に起因」】

・「少し笑話になるが、我が国でも今度の大战中、或る方面で原子核崩壊の研究委員会が出来ていた。そこの委員である一人の優秀な物理学者が、関係官庁の要路の人のところまでわざわざ出かけて来て、その研究に必要な資材の入手方の斡旋を乞はれた。その時の要求が真鍮棒1本であったといふ話である。冗談と思はれる人もあるかもしれないが、私は自分の体験から考へて、多分それは本当の話であらうと思っている。」

・「いくら日本が資材に乏しいといつても、かういふ重要な問題の研究に、真鍮棒1本渡せない筈はない。無いものは真鍮棒1本ではなくて、一般の科学に対する理解なのである。そしてそれほどまでに科学者以外の人々が科学に無理解であるといふことは、煎じつめたところ**国力の不足に起因する**のであらう。」

.....

・【日本の原子爆弾の研究などは、夢物語であった】

・「中谷の言うやうな研究難と物資不足の日本で、「F研究」などの原爆への研究は、遥かかなたの**夢物語**ではなかつただらうか。」

- ・【理研のサイクロトロンを完成させた仁科芳雄の言葉】
- ・「世論がいわゆる緒戦の戦果に酔っている頃、〔仁科〕先生がいわれた最初の言葉は『馬鹿な戦争を始めた。本当にアメリカの実力を知らないから、こんなことをするんだね。今に大変なことになる』であった。」
- ・「アメリカの実力の譬喩としてサイクロトロンの経験を話された。真空ポンプを注文しても日本の大会社では条件にはまるものをを作り得ず、〔仁科〕先生自身が会社の技師を指導して、半年もかからねば合わない現状なのに、『アメリカではこんなものは電話一つで届くんだよ。万事にこれだけの違いがある。そういう国に戦争を挑んでいることを考えて見なさい』と嘆息された。」

〔小倉真美「一編集者の見た仁科先生の横顔」、『仁科芳雄—伝記と回想』(朝永振一郎・玉木英彦編、1952) p 137: 文献④〕

- ・【的中した仁科芳雄の予言】
- ・〔上記の仁科芳雄の予言は、はからずも現実のものとなったのである。当時の日本の指導者たちが、いかに世界を知らなかったかがわかる。〕

- ・〈湯川秀樹〉・10～11月、「週刊朝日」に「静かに思ふ」を書く。

- ・〔この「静かに思ふ」は、『自然と理性』（新学芸叢書2、秋田屋刊）に収録されるに際して、巻頭の部分が大幅に削除された。小沼編：文献③及び後述を参照。〕
- ・〔小沼編：文献③は「静かに思ふ」の「完全版」を収録、以下の引用はこれによる〕
- ・〔「静かに思ふ」は、8月15日以降の「反省と沈思も日々」をへてのはじめての文章である。〕

- ・【永久に平和的国家として・・・戦争は常に人類の上に・・・大きな悲しみ】



・「嗚呼最早や戦は終つた。日本は今後**永久に平和的国家としてのみ自己**の存在意義を見出さねばならぬのである。これは日本に取つて果して悲しむべきことであろうか。戦争は常に人類の上に数々の大きな悲しみを齎（もたら）す。」（p174）

・【人類に対して大変な罪を・・・自国の実力に不相応なまでに・・・】

・「日本は単に戦に負けただけではなかつた。人類に対して大変な罪をも犯してゐたのである。・・・**自国の実力に不相応なまでに巨額の軍事費**の重圧を、常に自らの上に課さなければならなかつた・・・」（p175）

・【原子爆弾の場合においても・・・国力の大きな差異が・・・】

・「原子爆弾の場合においても、人的及び物的資源の不足、工業力、経済力の貧困等を挙げる事が出来るであらう。一言にしていへば、彼我の**国力の大きな差異**が物を言つたのである。・・・最高指導者がこの点を無視したこと自身が最も非科学的であつたといはねばならぬ。・・・原子爆弾を可能ならしめたのは、もともと物理学の最も先端的な領域における基礎研究であつた。しかるにこの領域内においてさへも、わが科学陣の全力が発揮されたとはいへない点があるのである。」（p184）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〔11月24日、GHQが理研その他のサイクロトロンを破壊を命令する。〕

・〈石原純〉・12月8日早朝、「千駄ヶ谷付近の路上にジープらしきものにはねられて倒れているのを発見された。」（「石原純年譜」〔石原紘執筆〕、「科学随筆全集2」：『物理学者の眼』、昭和36年、学生社、所収：文献②）

・〔「石原純の死」についての詳細は、拙著『石原純—科学と短歌の人生』（2003、

文献⑳)を参照願いたい。]

.....

・【昭和20年〔第15巻〕の『科学』】▼

・〔第15巻は第4号までの刊行予定であったが、結局〔第1号〕・〔第2号〕までの刊行となった。〕

・【第1号】・（9月号）・・〔発行日は、10月10日〕

・〔巻頭言〕「科学と自由」〔石原純〕〔事前原稿によるもの〕

・「科学は元来自由を欲する。否自由の天地の下でなければ科学は科学たり得るものでない。・・科学に王道はないからである。即ち科学は最も自由なる精神によつて・・正しき論理に従つて世界に通用し得る真理を最も完全にして且つ厳密な客観的事実によつて裏付けられて行く。」

・〔科学時事〕

・【訃報】・5月16日：科学史・桑木彥雄、4月14日：化学史・中瀬古六郎、6月7日：「西田哲学」の創始者・西田幾多郎、4月13日：天野清（東工大助教授）

・【第2号】・（10月号）・・〔発行日は、12月25日〕

・〔巻頭言〕「気宇を廣大に」〔石原純〕〔事前原稿によるもの〕

・「・・新しい世界観の建設が期待され、それが反科学的傾向のものであつてはならぬといふことから、我が国に於いては特に科学者の積極的な協力が要望されるのである。いま日本の科学者技術者は敗戦の現実のうちめされて呻吟すべきときではない。又連合国の出方によつて自己の進路を定めるといふやうな消極的な立場をとるべきではない。いまこそ力強く立ち上つて全国民に新しい希望を与ふべきではあるまいか。」

・ [科学時事]

・ 「**原子核研究の禁止か** 原子爆弾と関連して、日本に於ける今後の原子核研究はどうかは一般の注目をあびてゐるが、最初米軍総司令部の発注によれば理研の原子核研究は許可されたと云ふ報道があり、又は生物学及び医学に関してのみ禁止を解くといふ噂も弘まつたりしたけれども、結局11月に至つて米軍司令部は日本に於ける原子爆弾研究の資料提出を求め、なほ理研その他の研究所の調査を行なつた後、突如サイクロトロンの破壊を命令して来た。即ち理研原子核研究室、大阪帝大物理教室、京都帝大物理教室等のサイクロトロンは破壊されることになり、理研の本邦最大の装置は米軍の手によつて横浜沖に沈められるに至つた。但し未だ凡ゆる原子核研究を禁止するとの命令は出されてゐない。」

.....

・ 【サイクロトロン破壊への世界中の科学者からの怒り】

・ 「『戦争関連』施設の破壊のなかで最も悪名高いのは、1945年11月に行なわれた東京・理化学研究所のサイクロトロンを解体し、東京湾に投棄したことである。**世界中の科学者から湧き起こった怒りの声**に、ワシントンの当局は遺憾の意を表せざるをえなくなった。」〔ジョン・ダワー『増補版・敗北を抱きしめて』（上、三浦陽一・高杉忠明訳、2004、岩波書店、p79：文献⑤）

.....

・ 【サイクロトロンの再建と仁科芳雄】

・ 「その後のサイクロトロンの再建などについては、田島英三「理研のサイクロトロン」（玉木・江沢編『仁科芳雄』、1991：文献⑥）に詳しい。」

.....

\* 1945年ノーベル物理学賞：パウリ（スイス）「パウリの原理  
の発見」

\* 9月、哲学者・三木清、獄死。

\* 11月、GHQ、文部省に対して、印刷許可のない教科書の製造  
禁止を命じる。

.....

.....

・ **【1946年（昭和21年）】**

.....

・ 〈仁科芳雄〉・「原子爆弾」（『世界』3月号）

〔下記の引用は、「撰集・日本の科学精神⑤」、辻哲夫監修『世界のなかの  
科学精神』、1980、工作舎刊、所収による。〕

- ・ 「1月にロンドンで開かれた国際聯合総会に於て、原子力管理委員会が設  
置せられ、安全保障理事国にカナダを加えた12ヶ国から委員が選ばれ  
た・・・」
- ・ これにアメリカとロシアが案を提出した。アメリカ案の要点は、「世界の国  
家を支配し得る国際的な原子力開発機関を設置し、・・・武器として原子力を  
利用することは、何れの国にもこれを許さない。」「原子爆弾の問題に関する  
限り強国の拒否権を認めない・・・世界国家の建設に第一歩を踏み出したもの」  
であった。
- ・ このアメリカ案は、まさに世界連邦の思想を先取りしていたものといえよ  
う。アメリカ案に9ヶ国が賛成し、ポーランドロシア案を支持し、オランダ  
は棄権したという。

- ・ 〈湯川秀樹〉・3月、『目に見えないもの』（甲文社刊）

・・・〈自選集〉に収録。

- ・〔湯川『物理学に志して』（昭19、4月）の増補・改訂版である。

以下のように、多くの増補・改変がある。「科学者の使命」が削除されている。小沼は、「占領軍の検閲制度と出版社の自己規制が関係していた」と推測する（文献③、p243）。確かにGHQによる検閲制度は昭和24年10月まで続いていたと言われている。]

- ・ 〈湯川秀樹〉・3月、『目に見えないもの』（甲文社刊）

・・・〈自選集〉に収録。

- ・〔湯川『物理学に志して』（昭19、4月）の増補・改訂版である。

以下のように、多くの増補・改変がある。「科学者の使命」が削除されている。小沼は、「占領軍の検閲制度と出版社の自己規制が関係していた」と推測する（文献③、p243）。確かにGHQによる検閲制度は昭和24年10月まで続いていたと言われている。]

- ・【湯川『目に見えないもの』の目次】▼

- ・巻頭に「この書を 玉城嘉十郎先生の 霊前に捧ぐ」とある。

- ・序（昭和18年12月）

- ・「第一部」

- ・「中扉」のウラに下記の短歌1首を「増補」

・物みな底に一つの法ありと

日にけに深く思ひ入りつつ

- ・理論物理学の輪郭（昭20、4月）・・・「増補」

・・・〈選集・二〉・〈著作集・②〉、

- ・古代の物質観と現代科学（昭19、5月）・・・「増補」
  - ・・・〈選集・二〉〈著作集・③〉
    - 一 古代インドの自然観    二 現代の物質観との対比
    - 三 因果と時間の問題
- ・エネルギーの源泉（昭17、9月）・・・「改変」・・・〈選集・二〉
  - 一 物質の構造    二 放射線の本体    三 力とエネルギー
  - 四 原子内のエネルギー    五 太陽のエネルギー
- ・物質と精神（昭18、3月）・・・〈選集・二〉・〈著作集・③〉
  - 一 二つの通路    二 物理学的世界    三 物質から精神へ
  - 四 科学の根源
- ・「**第二部**」・▼〔『物理学に志して』にあった**3枚の写真なし**。〕
  - ・「中扉」のウラに下記の短歌1首を「増補」
    - ・われは物の数にもあらず深山木の
    - 道ふみわけし人し偲ばゆ
  - ・半生の記（昭16、11月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・⑥〉、
  - ・硝子細工（昭17、11月）・・・〈選集・一〉、
    - 〔・写真「恩師玉城嘉十郎先生」・・・「なし」。〕
  - ・少年の頃（昭17、6月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・⑥〉、
  - ・二人の父（昭17、10月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・⑥〉、
  - ・▼〔・写真「巴里滞在当時の小川琢治」・・・「なし」。〕
    - ・▼〔・写真「晩年の湯川玄洋」・・・「なし」。〕
- ・「**第三部**」
  - ・「中扉」のウラに下記の短歌1首を「増補」
    - ・深くかつ遠く思はん天地の
    - 中の小さき星に生れて
  - ・物理学に志して（昭18、4月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・①〉、
  - .....

・▼〔ここにあった「科学者の使命」が削除されている。〕

・〔・【1944年（昭和19年）】の項を参照のこと。〕

.....

・科学と教養（昭14、6月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・①〉、

・真実（昭16、1月）・・・〈選集・一〉〈著作集・⑥〉、

・未来（昭16、1月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・①〉、

・日蝕（昭11、12月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・⑥〉、

・眼の夏休み（昭16、9月）・・・〈選集・一〉〈著作集・⑥〉、

・読書と著作（昭17、9月）・・・〈選集・一〉、

・話す言葉・書く言葉（昭15、2月）・・・〈選集・一〉・〈著作集・⑥〉、

・「現代の物理学」（昭14、2月）・・・〈選集・二〉、

・「物質の構造」（昭17、1月）・・・〈選集・二〉、

・「ピエール・キュリー伝」（昭18、1月）、

・目と手と心（昭18、10月）、

・目に見えないもの（昭18、12月）・・・「増補」・・・〈選集・二〉

・思想の結晶（昭18、12月）・・・〈著作集・⑥〉

・「後記」・・・（昭20、12月）・・・「増補」

.....

・〔本書は、後に「講談社学術文庫」として刊行され〔昭和51年〕、  
湯川の「記念碑的作品」として多くの人に読み継がれている。〕

・5月、科学雑誌『**自然**』創刊（中央公論社刊）

・〔編集部：小倉真美・堀江弘・阿部わか子〕

・創刊号の【目次】から

・仁科芳雄「日本再建と科学」

・「原子爆弾の今後の発達は恐らく戦争を地球上より駆逐するで

あろう。否、吾々は速やかに戦争絶滅を実現せしめねばならぬ。」

- ・「理論的研究は外国から文献さへ入つてくれば研究はできる。外国雑誌の輸入は今日まだ実現されていないが、それは早晩可能となるであらう」
- ・〔この時期、当然ながら日本の科学研究は停滞していた。湯川らは、研究書・啓蒙書の執筆に多くの時間を費やしていたのである。〕

・湯浅光朝「科学文化史年表」(1)〔長期の連載がはじまる〕

.....

・〈湯川秀樹〉・7月、『理論物理学講話』（朝日新聞社刊）

- ・雑誌『科学朝日』（創刊：昭和16年、朝日新聞社刊）に連載した「物理学入門」をまとめたもの（予定の三分の一ほどで中断している）。

・【湯川『理論物理学講話』の目次】▼

- ・序（昭和20年3月）
- ・第一講 緒論                      ・第二講 運動と力について
- ・第三講 仕事と熱について      ・注釈〔小林稔・金井英三〕

.....

・【昭和21年〔第16巻〕の『科学』】▼

- ・【第1号】・（3月号）〔表紙に「石原純（主任）」の記載あり。〕
  - ・〔巻頭言〕「高等学校における科学教育」〔石原純〕
  - ・〔石原純による最後の「巻頭言」〔絶筆〕であると思われる。〕
- ・武谷三男「ガリレイの動力学に就いて（I）」
- ・【第2号】・（4月号）〔表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。〕
  - ・武谷三男「ガリレイの動力学に就いて（II）」



- ・ [第3号] ・ (5月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ [第4号] ・ (6月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ [第5号] ・ (9月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ [科学時事] 「日本数学物理学会」が、「日本物理学会」と「日本数学会」に分離独立したことを報告している。
- ・ [第6号] ・ (10月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ [第7号] ・ (11月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ 「日本数学物理学会の解散と日本物理学会及び日本数学会の誕生」
  - ・ 「日本数学物理学会の解散」「日本物理学会の設立」 (小谷正雄)
- ・ 「日本数学会の誕生」 (彌永昌吉)
  - ・ [それぞれ学会が分離して、初めての学会の総会と分科会の模様を紹介している。物理学会の第一会場は「素粒子論」で最も多くの参加者であったという。特に坂田昌一率いる「名大素粒子研究団」の今後に期待している。]
- ・ [第8号] ・ (12月号) [表紙の「顧問」の中に「石原純」の記載あり。]
- ・ 武谷三男「物質と場の対立—素粒子物理学の難点の分析—」
- ・ 坂田昌一「素粒子論の方法—素粒子の相互作用の理論 I」
- ・ 井上健・高木修二「電子の自己エネルギー—素粒子の相互作用の理論 II」
- ・ [坂田・井上らの論文は「名大素粒子研究団」による共同研究。]
- ・ . . . . .
- ・ 【昭和21年〔第1巻〕の『自然』】 ▼
  - ・ [創刊号] ・ (5月号) [32頁、特価4円] . . . [前記参照]
  - ・ [第2号] ・ (6月号) [32頁、4円50銭]
  - ・ 小倉金之助「科学発達史上に於ける民主主義」
    - ・ 「今日わが日本が民主主義的文化国家を建設するためには、科学の振興を絶対に必要とする。」

- ・「民主主義の発達した時代には、科学の進展を見、これに反して反民主主義の時代には、科学の衰頹を来す」
- ・〔この論考は、注と年表などを大幅に「補訂」し、『数学史研究第二輯』に収録された。〕（「小倉・著作集①」に収録）

・ [第4号] ・ (8月号) [32頁、4円50銭]

・ 坂田昌一「湯川理論発展の背景」

- ・〔自註と編註とがあるが、文献《F》：坂田『物理学と方法 論集1』には「自註」のみを収載。〕
- ・「1.原子核の構成とベータ放射能」
- ・「2.湯川理論の展開」
- ・「3.科学を発展せしめるものは何か！」
- ・「科学者よ、団結して科学を徒勞から救ひ、科学を人民の手に返すことに努力しようではないか！」

・ [第5号] ・ (9月号) [32頁、4円50銭]

- ・〔巻頭言〕小倉金之助「文学と科学—小説発生時代の科学について—」
- ・〔『数学の窓から』、角川文庫に収録（「小倉・著作集」に収録なし）〕。

・ [第6号] ・ (10月号) [32頁、4円50銭]

- ・〔巻頭言〕仁科芳雄「国民の人格向上と科学技術」

・ [第7号] ・ (11月号) [32頁、4円50銭]

- ・〔巻頭言〕中谷宇吉郎「日本科学の再検討」
- ・渡邊慧「研究生生活の民主化と研究費」

・ [第8号] ・ (12月号) [32頁、4円50銭]

- ・〔巻頭言〕小倉金之助「革命期に於ける科学書の刊行」
- ・〔『一数学者の肖像』、現代教養文庫に収録（「小倉・著作集」に収録なし）〕。

.....

\* 1946年ノーベル物理学賞：ブリッジマン（米）「超高压圧縮機の

発明とそれによる高圧物理学の研究」

\* 1月、総合雑誌『世界』を創刊（岩波書店）

\* 1月、雑誌『展望』を創刊（筑摩書房）

\* 1月、民主主義科学者協会〔民科〕創立大会〔会長・小倉金之助〕

\* 2月、雑誌『評論』を創刊（河出書房）

.....

.....

・【1947年（昭和22年）】

.....

・〈湯川秀樹〉・2月5日、『量子力学序説』（弘文堂刊）

・〈湯川秀樹〉・2月25日、『自然と理性』（新学芸叢書2、秋田屋刊）

・・・〈自選集〉に収録。ただし「静かに思ふ」は〈自選集〉に収録なし。

・【湯川『自然と理性』の目次】▼

・序（昭和21年歳晩）

・「第一部」

・科学と希望とについて（昭21、6月、「潮流」）

・「科学の発達ということそれ自身の中に、人類が破滅から救われるという確かな希望を見出し得るのである。」（著作集⑤、p22）

・〔「悲痛な戦争体験からの希望の根拠」〕

1) 科学は、世界的であり、宇宙的である。

2) 人文科学、社会科学と自然科学の全面的な発達。

・原子力と合理性とについて（昭21、8月、「毎日新聞」）

・〔著作集⑤に収録〕

・「「理性」の力が科学を発達させ、新たな視野を獲得できた。」

・〔原子時代を生きるための「理性」を信じる湯川〕

・〔本書のタイトル「自然と理性」に繋がる論考である。〕

- ・物質文明と精神文明（昭21、8月、「朝日新聞」）
- ・人間の宇宙的地位（談話速記、昭21、6月、「朝日評論」）
- ・物質と言葉（昭21、7月、「読書新聞」）
  - ・〔岩波茂雄追悼講演会・京都〕
- ・私どもの使う言葉（昭21、4月、「国語国文」）
- ・科学日本の再建（昭20、10月、「科学朝日」）
  - ・〔基礎科学の振興〕    ・〔科学精神のための科学史研究〕
- ・自己教育（昭21、1月、「世界」）
- ・**静かに思ふ**（昭20、11月、「週刊朝日」）
  - ・ ・ 〈**選集一**：半生の記〉の末尾に収録。
  - ・ ▼ ・ 〈**自選集**〉には**収録されていない**。
  - ・ 「ずっと以前の文章で現在の私の好みに合わないものを捨ててゆく」との記述あり（巻1「まえがき」）。
  - ・ ・ 〈**著作集⑤**：平和への希求〉の巻頭に収録
  - ・ 「一」の項を削除、**改変あり**。〔小沼：文献③④参照〕
  - ・ 末尾に以下のような「付記」がある。

「附記 終戦後二ヶ月ほどの間、色々な新聞や雑誌からの原

稿の固くお辞はりして沈思と反省の日々を送つて来た。・・・  
 一年後の今日から見るとまだまだ反省が足りないが、その  
 時の気持ちがある程度まで現はれてゐると思はれるので再  
 録することにした。（昭和21年11月記）」

- ・ 「**第二部**」
- ・ 近代に於ける物理学の発達
  - ・ 〔昭和20年7月27・28日、京都帝国大学における外国留学生  
 に対する講演〕
  - ・ 「第一講」 ・ 一、近代科学の源流    ・ 二、近代科学の成立

- ・「第二講」・三、古典物理学の体系化　・四、現代物理学の特質

.....

- ・〈湯川秀樹〉・11月、雑誌「自然」に「**観測の理論**」を連載。

- ・「自然」（1947年11月号、1948年3月・7月号、全3回）

- ・〔脚注・図解：堀江 弘〕

- ・〈坂田昌一〉・12月、『**物理学と方法**』（白東書院刊）

.....

- ・【昭和22年〔**第17巻**〕の『科学』】▼

- ・【**第1号**】・（1月号）〔表紙の顧問に「**石原純**」の記載あり。〕

- ・【**第2号**】・（2月号）〔表紙の顧問に「**石原純**」の記載あり。〕

- ・▼〔石原純の「顧問」表示は、**この号まで**である。〕▼

.....

- ・【**第4号**】・（4月号）.....

- ・【**石原純博士追悼号**】

- ・岡田武松：「石原さんと“科学”」

- ・柴田雄次：「故石原純君追憶」

- ・玉蟲文一：「**石原純博士の追憶**」

- ・菅井準一：「**石原純—特にその日本科学史上の地位—**」

- ・1.前期—理論物理学上の諸研究（1906—1921）

- ・2.後期—科学論の形成、社会的活動（1921—1945）

- ・〔この論考などについては、拙著『石原純—科学と短歌の人生』

（文献⑳）を参照されたい。〕

.....

- ・【**第5号**】・（5月号）

- ・〔新刊書〕・**武谷三男**『**弁証法の諸問題**』・**原光雄**『**自然弁証法の研究**』

・湯川秀樹『量子力学序説』（渡邊慧）

・ [第6号] ・ (6月号)

・ [寄書] 湯川秀樹「観測の問題について」

・ [『湯川『量子力学序説』への補足』]

・ [第8号] ・ (8月号)

・ [時事] ・ 「アメリカにおける原子力研究の平和的転換」

・ 「400トンのサイクロトロン」の威力」〔カルフォルニア大学〕

・ [第11・12号] ・ (12月号)

・ [新刊書] ・ 藤岡由夫『科学教育論』（教育文庫7、河出書房） /

・ 塩野直道『数学教育論』（教育文庫5、河出書房）〔小倉金之助〕

.....

・ 【昭和22年〔第2巻〕の『自然』】 ▼

・ [第1号] ・ (1月号)〔40頁、6円〕

・ [巻頭言] 伏見康治「原子建築の設計者達」

・ [第3号] ・ (3月号)〔40頁、8円〕

・ [巻頭言] 小倉金之助「出発」

・ [小倉『数学の窓から』、角川文庫に収録。「小倉・著作集」になし。]

・ 湯川秀樹「思い出すこと」〔編集部による註がある。]

・ [中間子論への道程を回顧する文。田辺元・石原純の著作に言及。]

・ [湯川『科学と人間性』、昭和23年、国立書院刊；文献③に収録]

・ [第7号] ・ (7月号)〔32頁、15円〕

・ [巻頭言] 小倉金之助「民主革命の徹底へ」

・ 「科学再建の大業を果たすためには、民主主義革命を徹底的に遂行

し、真に解放された人民による、人民のための科学を建設するより

ほかに、道がないのである。」

[小倉『一数学者の記録』、酣燈社に収録。「小倉・著作集⑦」に収録。]

・ [第9号] ・ (9月号)〔40頁、20円〕

・坂田昌一「研究と組織」

- ・〔1. はしがき 2. 大学は何故老衰したか 3. ラボラトリー・

デモクラシー 4. 新しい組織 5. 一年間の反省〕

・〔研究室民主化への実践的報告である。〕・・・〔文献②に収録〕

・〔坂田は、1946年から「研究室会議」を行なうなど、「研究の民主化」を身をもって実行していた。〕

・〔第11号〕・（11月号）〔40頁、20円〕

・〔巻頭言〕小倉金之助「重点主義の課題」

〔『一数学者の記録』、酣燈社に収録。「小倉・著作集⑦」に収録。〕

・湯川秀樹「観測の理論①」〔堀江弘による脚註・図解がある。〕

・金関義則「学術体制の刷新」

・〔学術体制刷新委員の「理学部門」に「彌永昌吉・坪井忠二・

湯川秀樹・柴田雄次・小倉金之助」などの名がある。

.....

\* 1947年ノーベル物理学賞：アプルトン（英）「上層大気の物理学  
とくに電離層の研究」

\* 3月、教育基本法・学校教育法各公布。

\* 5月、日本国憲法が施行される。

\* 12月、横光利一没。

.....

.....

・【1948年（昭和23年）】

.....

・〈湯川秀樹〉・5月、『科学と人間性』（国立書院刊）

・・・〈自選集〉に収録。

・【湯川『科学と人間性』の目次】▼

・「はしがき」（昭和22年11月）

- ・〔「昭和21年の中頃から22年8月」までの随筆集である。〕
- ・一、科学と哲学のつながり
- ・二、事実と法則（昭和22年8月）
- ・三、偶然と必然（昭和22年8月）
- ・四、知識と知恵とについて（昭和22年5月）
- ・五、**知と愛とについて**（昭和22年5月）・・・〔**著作集⑤**に収録〕
  - ・「昭和21年は食糧の危機であった。世界的豊作とアメリカはじめ  
 連合諸国の人類愛に根ざす救援とのおかげで、どうやらこの  
 危機を乗り切ることができた。」（p75）
  - 【原子力発電所の出現を予言する湯川】
  - 「原子エネルギーの動力化は・・・原理的な困難が存在しない以上、  
 早晩大電力発電所が出現するであろうことが十分期待される。」
  - （p77）
- ・六、運命の連帯
- ・七、物理学の現段階（昭和22年1月）
- ・八、物理学の前途（昭和22年1月）
- ・九、一つの宿題（昭和22年1月）
- ・十、思い出すこと（昭和22年3月）
- ・十一、小さい心（昭和22年4月）
- ・十二、**京の山**（昭和21年5月）・・・〔小沼：文献③に再録〕
  - ・〔東京大学教授への転任の話に揺れる心、京都への愛着が  
 にじみ出ている文章である。〕
- ・十三、読書偶感
  - ・「プリンキピア」（昭和14年6月）
  - ・「物理学ノート」「驢馬電子」（昭和17年7月）
  - ・「京大理学講座第一輯」（昭和22年6月）

.....



- ・ 〈湯川秀樹〉 ・ 8月、『物質観と世界観』（弘文堂刊）
  - ・ 【湯川『物質観と世界観』の目次】 ▼
  - ・ 「序」（昭和23年7月）
  - ・ 一、物質世界の客観性に就て・・・〔「哲学季刊」（秋田屋刊）に連載〕
    - ・・・ 〈選集・四〉
    - ・ 〔一 古典論及び相対論の世界 二 量子論の対象  
三 量子力学の世界〕
  - ・ 二、理論物理学に就て・・・〔日本学術協会での特別講演〕
    - ・・・ 〈著作集・③〉
    - ・ 〔一 現代物理学の概観 二 時間と空間 三 粒子と波動  
四 観測の問題〕
  - ・ 三、中間子に就て・・・〔京都大学化学研究所での特別講演〕
    - ・・・ 〈選集・四〉
    - ・ 〔一 原子核に就て 二 核力に就て 三 宇宙線に就て  
四 素粒子に就て〕
  - .....
- ・ 〔1948年（昭和23年）〕
- ・ 〈湯川秀樹〉 ・ 9月、プリンストン高等学術研究所客員教授となり  
渡米する〔出張〕。
- ・ 〈湯川秀樹〉 ・ 12月、『原子と人間』（甲文社刊）
  - ・・・ 〈自選集〉に収録。ただし、「原子と人間〔詩〕」などは  
〈自選集〉に収録されていない。
  - ・・・ 〈選集〉には、収録されているが、〈自選集〉には、収録

されていないもの〔★〕。

・【湯川『原子と人間』の目次】▼

・「口絵写真」（2枚）、その他の写真もあり。

・原子と人間〔詩〕・・・（「PHP」昭22、3・4月合併号）

・・・〈選集三〉に収録。・・・〔★〕。

・〔原子爆弾の誕生までを、書いたこの詩は、実に感動的な作品である。〈自選集〉・〈著作集〉に収録がないのは、残念である。なお、〈選集三〉には同タイトルの散文「Ⅱ」「Ⅲ」が収録されている。〕

・〔この本のタイトルになっている詩である。〈選集三〉のタイトルもまた「原子と人間」である。〕

・【湯川「原子と人間」の詩〔部分〕】▼

・「遂に原子爆弾が炸裂したのだ

遂に原子と人間とが直面することになったのだ

・・・〔略〕・・・

**原子時代が到来した**

人々は輝しい未来を望んだ

・・・〔略〕・・・

**原子はもっと危険なものだ**

原子を征服できたと安心してはならない

**人間同志の和解が大切だ**

**人間自身の向上が必要だ**

・・・〔略〕・・・」

・【終戦直後の3年間は、啓蒙の時代であった】

・〔湯川は、後にこの詩を引用して、「詩などと呼べるほどのものではなく、少年少女向きの短文とでもいった方が当たっている」と

述べている。終戦直後の3年間は「一種の啓蒙時代であり」その産物であるという。（湯川「**自分の書いた本**」参照、著作集⑥所収）

- ・ 目に見えないもの（「あさあけ」昭22、9月）
  - ・ 〈**自選集**（1）〉に収録。「目に見えないもの（1947）」。
- ・ **科学の進歩と人類の進化**（「京都日日新聞」昭22、8月14日）
  - ・ ・ 〈**自選集**（3）〉 ・ 〈**著作集**⑤〉に収録。
  - ・ 「原子爆弾が文明の破滅に導くか否かは、これが出現した地球的世界に人類が全体として適応するか否かにかかっている。」
  - ・ 「我々の祖国は地球上最初にこの破壊的な原子力の犠牲となり、**平和な道義国家として立つ運命**の暗示をうけた。我々日本人こそ**倅せな人間社会の顕現のために先頭に立って進むべき尊い使命を帯びているのだ。**」
  - ・ 【科学の進歩と人間の進化】
  - ・ 「湯川の率直で素直な文章は、**平和への願いの決意表明**であった。これ以後の**主張の原点**がここにある。すなわち、**科学の進歩とともに人間も進化**しなければならないとうことである。」
- ・ 宇宙における人間の立場（「学園新聞」昭21、8月6日） ・ ・ 【★】
- ・ 科学の可能性（「時論」昭23、8月） ・ ・ 【★】
- ・ **二十世紀の不安**（「新大阪新聞」昭23、4月19日）
  - ・ ・ 〈**自選集**（3）〉 ・ 〈**著作集**⑤〉に収録。
  - ・ 【絶望の世紀から希望の世紀への転換】
  - ・ 「人間が相互に他の人間性を認めることによって和解し、
    - ・ ・ **原子力を平和的目的に活用**するために全面的に協力することによって二十世紀の不安が除かれ、 ・ ・ **絶望の世紀から希望の世紀に転換される**ことを期待できるのである。」
- ・ 合法則性と偶然性（「毎日新聞」昭23、8月15日） ・ ・ 【★】

- ・常識と非常識（「中部日本新聞」昭23、5月17日）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・法律と法則（「平安」昭23、1月） ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・単数と複数（「婦人の友」昭22、12月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・あざみと馬（「手帖」第一冊、昭21、8月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・思索断章 ・ ・ ・ 〈選集〉 ・ 〈自選集〉に収録なし。
- ・法則性について ・世界観について ・可能性について
  - ・直観について ・総合について ・科学的精神について
  - ・心理について ・美について ・道徳について
  - ・連帯感について ・文化について ・学問について
  - ・勉学について〔一・勉学について 二・書物について〕
- ・鏡と写真（「アサヒグラフ」昭23、2月18日）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
  - ・ ▼〔自画像のスケッチあり。〕
- ・自然美と人間美（「人間美学」昭23、5月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・詩と科学—こどもたちの為に—（「随筆四季」第二輯、昭21、12月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・ふるさと（「週刊朝日」昭22、9月28日）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・短歌に求めるもの（「はにつち」昭22、11月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・水滸伝の座談会に寄せて（「新文学」昭23、4月）
  - ・ ・ 〈選集一〉に、収録。
- ・現代の物理学について（「信濃教育」昭23、2月）

・・・〈選集〉・〈自選集〉に収録なし。

・現代物理学を生み出した人々（「中部日本新聞」昭23、1月）

・・・〈選集三〉に、収録。

・渡米に際して　　・・・〈選集一〉に、収録〔★〕。

・「一」（「京都新聞」昭23、8月30日）

・「二」（「洛北高校新聞」昭23、7月）

・「三」（「世界の子供」昭23、9月）

・アメリカ日記——1939年——・・・〈選集〉・〈自選集〉に収録なし。

・・・〈著作集⑦〉に収録。

・「はしがき」　・「8月25日～10月13日」の日記

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・〈湯川秀樹〉・12月、日本学術会議第一期会員に選出される。

（1951年1月まで）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・【昭和23年〔第18巻〕の『科学』】▼

・〔第2号〕・（2月号）

・柿内賢信「Max Planck」〔追悼文〕

・〔第3号〕・（3月号）

・〔巻頭言〕「学術体制はいかに刷新されるか」（B.T.）

・〔「日本学術会議」が発足するまでの過渡期であった。〕

・〔新刊書〕三上義夫『文化史上より見たる日本の数学』

・〔時事〕「学術体制刷新委員会第7回第8回総会」

「株式会社科学研究所〔旧理化学研究所〕の発足」

・〔第4号〕・（4月号）

・〔話題〕「中間子、宇宙線の問題をめぐって」（富山小太郎）

- ・〔湯川秀樹の**中間子論**などに世界が注目している。〕
- ・亀山直人「理工学研究所」〔東京大学附置〕
- ・馬場重徳「第二次世界大戦後におけるアメリカの科学振興策」
- ・「**学術体制刷新委員会から内閣総理大臣へ答申した新体制案**」  
〔抜粋〕
- ・〔新刊書〕**天野清選集 I 『量子力学史』**（富山小太郎）
- ・〔**第7号**〕・（7月号）
- ・〔科学時報〕「**素粒子論**」（中村誠太郎）
- ・〔**第10号**〕・（10月号）
- ・谷川安孝「**中間子理論の現状**」
- ・〔**第12号**〕・（12月号）
- ・「**二中間子論**」（**武谷三男**・中村誠太郎・小野健一・佐々木宗雄）  
.....
- ・【昭和23年〔**第3巻**〕の『**自然**』】▼
  - ・〔**第1号**〕・（1月号）〔48頁、30円〕
    - ・〔巻頭言〕矢野健太郎「研究発表と研究意欲」
    - ・〔編集後記〕  
  
「燃料はなく、停電はつづき、空腹はみたされず、終戦後3度目の  
お寒い新春である。」
  - ・〔**第3号**〕・（3月号）〔48頁、30円〕
    - ・〔巻頭言〕**仁科芳雄**「**ユネスコと科学**」
- ・稲沼瑞穂〔文部省科学教育局〕
  - 「**学術体制はどこまで刷新されるか**」
    - ・**湯川秀樹**「**観測の理論②**」〔堀江弘による脚註・図解がある。〕
- ・〔**第4号**〕・（4月号）〔48頁、30円〕
  - ・渡邊慧「**栗鼠と猫—観測論に関する試論—**」
- ・〔**第5号**〕・（5月号）〔48頁、30円〕

- ・〔巻頭言〕丘英通「**学術体制刷新をよそに見る**」
- ・村越司〔地下資源調査所〕「**学術刷新の底を流れるもの**  
—学術体制刷新委員会から日本学術会議まで—」
- ・金関義則〔毎日新聞学芸部〕「**刷新委員は連記の数学をいかに解いたか**」
- ・〔**第6号**〕・（6月号）〔48頁、40円〕
- ・〔巻頭言〕仁科芳雄「**株式会社科学研究所の使命**」
- ・金関義則「**日本学術会議（Ⅰ）—学術体制刷新委員会の結論—**」
- ・〔**第7号**〕・（7月号）〔48頁、40円〕
- ・〔巻頭言〕玉蟲文一〔武蔵高校〕「**新しい大学の性格**」
- ・〔**一般教養の重視が新制大学の特色**となる。玉蟲文一は、後に  
**東京大学の教養学部**の創設に尽力することになる。〕
- ・〔後に、東京大学教養学部は、**数多くの科学史家を輩出して**、  
1970年代の科学史ブームを牽引した。〕
- ・金関義則「**日本学術会議（Ⅱ）—学術体制刷新委員会の責任—**」
- ・湯川秀樹「**観測の理論③**」〔堀江弘による脚註・図解がある。〕
- ・〔**第8号**〕・（8月号）〔48頁、40円〕
- ・〔巻頭言〕渡邊慧「**亡びるもの興るもの**」
- ・「**素粒子論関係の会場の如きは、・・・まさに立錐の余地なく・・・**」
- ・〔京都における**日本物理学会の盛況ぶり**を伝えている。〕
- ・〔**第10号**〕・（10月号）〔48頁、50円〕
- ・〔巻頭言〕湯川秀樹「**学術の交流**」
- ・「**終戦後僅か3年間の世界物理学の著しい進歩**を顧みる時、世界の  
平和とそれに伴う知識の交流とが学術の発達に取ってどんなに大切  
な条件であるかが今更の如く痛感される。学問も一つの生き物である。  
る。」
- ・〔**第11号**〕・（11月号）〔48頁、50円〕
- ・森永晴彦「**原子核破壊装置（Ⅰ）**」

・ [第12号] ・ (12月号) [48頁、50円]

・ 「**新しき電源**」 (弘山尚直：東京都商工局電力部)

・ 「1. まえがき 2. 電源の開発方針 3. 電力の需給状態

4. 新しい電源 (A.風力発電 B.地熱発電 C.潮力発電

D.太陽熱発電 E.原子力発電) 5. むすび」

・ E.原子力発電：「試験用のものが今年中にアメリカで製作される

という話である。」〔原子力発電の項は、わずか6行の記述である。〕

.....

\* 1948年ノーベル物理学賞：ブラケット (英) 「ウィルソン霧箱の

方法の発展、ならびに原子核物理学と宇宙線の領域における諸

発見」

\* 4月、新制高等学校 (全日制・定時制) 発足

\* 6月、太宰治入水自殺。

\* 7月、**日本学術会議法**公布、**教育委員会法**公布

\* 9月、**朝永振一郎**「くりこみ理論」。学士院賞受賞。

.....

.....

・ **【1949年 (昭和24年)】**

.....

・ 〈湯川秀樹、42歳〉・ 8月、コロンビア大学客員教授となり、  
ニューヨークに移る。

・ 〈湯川秀樹ほか著〉・ 9月、『物理学の方向』 (三一書房刊)

・ 【湯川ほか著『物理学の方向』の目次】 [湯川の部分のみ] ▼



- ・ 〈Ⅰ〉湯川「素粒子論の方向について一序に代えて一」
- ・ 〈Ⅱ〉湯川「科学的思考について一物理学の対象と法則一」
  - ・〔昭和22年11月、慶応大学での講演を増訂したもの。〕
  - 〔・・・以下、省略・・・〕

.....

- ・ 〈湯川秀樹〉・11月、「核力の理論的研究に基づく**中間子の存在の  
予言**に対して」**ノーベル物理学賞**の授賞が決まる。

- ・ 〈湯川秀樹〉・12月、**ノーベル物理学賞授賞式**

- ・ 12月、『**理化学辞典**』〔新增補改訂版〕発行〔岩波書店刊〕

- ・「**編輯顧問**：岡田武松・寺田寅彦・柴田雄次」

- ・「**編輯者**：石原純（主任）・井上敏・玉蟲文一」

- ・〔石原純が「**編輯者**」として関わった**最後の版**である。奥付には、  
「**編輯代表者 石原純（いしはら じゅん）**」とある。〕

- ・最近の石原純関係書では、「**いしわら じゅん**」とのルビも多く

- みられるが、私の管見の限り石原純生前の書物には、すべてに

- 「**いしはら じゅん**」とルビがあった。確かに石原純は、欧文の

- 学術論文では「Jun Ishiwara」と記述しているが、和文の単行本

- では「**いしはら じゅん**」とルビをしている。おもうにフランス語

- では「h」は発音されないので「Ishiwara」と表記したのであろう。〕

.....

- ・【昭和24年〔**第19巻**〕の『**科学**』】▼

- ・【**第1号**】・（1月号）

- ・朝永振一郎「**素粒子論の進展—無限大の困難をめぐって—**」

- ・〔新刊書〕朝永振一郎『量子力学（I）』
- ・〔時事〕「アメリカにおける素粒子論研究の近況」
  - ・〔湯川・朝永らの研究に注目している米英の物理学者たち〕
- ・〔第2号〕・（2月号）
  - ・〔巻頭言〕「日本学術会議と学会」〔S.I.=彌永昌吉〕
  - ・「中間子の崩壊及び捕獲について」〔宮崎友喜雄：科学研究所仁科研究室〕
  - ・〔時事〕「日本学術会議会員きまる」〔選挙による。任期2年〕
    - ・〔全国区=物理学：茅誠司・武谷三男・朝永振一郎・仁科芳雄・伏見康治・湯川秀樹〕
    - ・〔地方区=物理学：藤岡由夫・坂田昌一・荒勝文策ら〕
- ・〔第4号〕・（4月号）
  - ・〔巻頭言〕「日本学術会議の成立」
  - ・〔時事〕「日本学術会議総会」、「原子力戦争に対する恐怖」
- ・〔第5号〕・（5月号）
  - ・〔巻頭言〕「自然科学者と平和運動」（玉蟲文一）
    - ・「わが国の自然科学者の平和運動に対する関心は未だ低調のように感じられる。・・・われわれはこの問題について今こそ積極的に討議し且つ行動すべき責任をもっている。」
- ・〔第6号〕・（6月号）
  - ・〔話題〕「学問の民主化について」（彌永昌吉）
    - ・「どの意味でもよい、“学問の民主化”が熱心に成されることを希望する。今日の学問はいうまでもなく特権階級のものではないのであるから。——」
- ・〔第8号〕・（8月号）
  - ・〔巻頭言〕「科学と平和」〔S.I.=彌永昌吉〕
    - ・「よいことにも悪いことにも使われる“頭脳”、あるいは“科学”！
    - ・・——人類のモラルを高める以外に平和を保証する道はないのでは

あるまいか。」

・ [第12号] ・ (12月号)

・ [巻頭言] 「**学問研究の自由**」 [K.T.]

- ・ 「学問の研究はできうるだけ自由な境地において進めなければならない。むしろ、自由に進めうるような境地を積極的に作っていくことが必要だというべきかもしれない。」

.....

.....

・ 【昭和24年 [第4巻] の『自然』】 ▼

・ [第1号] ・ (1月号) [56頁、60円]

・ [巻頭言] **朝永振一郎**「**かなしい現実**」

- ・ 「**紙と印刷能力の不足**は我々にとって決定的である。・・・学術雑誌はもっと豊かに出版されねばならない。」
- ・ [学術雑誌の刊行の遅れが、学問の進展を阻害しているとなげく  
朝永振一郎]

・ [第3号] ・ (3月号) [48頁、50円]

・ **坂田昌一**「**湯川理論展開の径路 (I)**

——続『湯川理論発展の背景』——

- ・ [1. 湯川の導入から中間子の発見まで 2. 大阪時代の初期  
3. 武谷三男君の「三段階論」 4. 第二・第三論文発表のころ  
5. 大阪時代の末期 ]

・ [第4号] ・ (4月号) [56頁、60円]

・ [巻頭言] **小倉金之助**「**今日の課題**」

- ・ [日本学術会議の成立に対する期待と今後の実践への監視と鞭撻が必要である。]

・ 江上不二夫「日本学術会議第1回総会に臨む」

・ 「**日本学術会議会員選挙結果概要**」

- ・〔選挙結果の得票数まで詳細に報告されている。〕
- ・〔「第4部」のトップは「540票・湯川秀樹」である。〕
- ・ [第6号] ・ (6月号) [62頁、70円]
- ・ 彌永昌吉「日本学術会議第2回総会」
  - ・ 「第一に学術会議自身の予算が微々たるもので、・・・研究費や研究発表費の予算にしても、・・・文部省から要求された全額そのものが、十分なものではないのである。」
- ・ 高林武彦「電子の発見—量子力学史1—」
- ・ [第7号] ・ (7月号) [64頁、70円]
- ・ 高林武彦「電子の発見 (Ⅱ) —量子力学史1—」
  - ・ 「高林武彦氏の力作、量子力学史は果然好評である。」 (編集後記)
- ・ [第9号] ・ (9月号) [64頁、70円]
- ・ [巻頭言] 小泉丹「世界平和運動に」
  - ・ 「世界平和運動、戦争絶止運動は、あらゆる有力国家に於て、あらゆる職能者の、広範な成員の参加を得て始めてその力がある。」
- ・ 高林武彦「電子の発見 (Ⅲ) —量子力学史1—」
- .....
- \* 1949年ノーベル物理学賞：湯川秀樹 (日本) 「核力の理論による中間子の存在の予言」
- \* 4月、「科学史研究」復刊第一号 (日本科学史学会)
  - ・ 小倉金之助「科学史研究の任務」
  - ・ [桑木或雄追悼号] ・ 桑木務「父を想う」
  - ・ 矢島祐利「桑木或雄博士の追憶—その業績と学風—」
- \* 4月、岩波新書「青版」を刊行開始。
  - ・ 中谷宇吉郎『科学と社会』など。
- .....

.....

- ・ **【1950年（昭和25年）】**

.....

- ・ 〈坂田昌一、39歳〉・5月、「二中間子仮説の提唱」により日本学士院賞（恩賜賞）授賞

- ・ 〈湯川秀樹、43歳〉・8月、一時帰国。

.....

- ・ **【昭和25年〔第20巻〕の『科学』】 ▼**

- ・ **【第1号】** ・ (1月号)

- ・ 〔巻頭言〕「半世紀の回顧」〔B.T.=玉蟲文一〕

- ・ 「湯川博士のノーベル賞受賞を祝す」

- ・ **【第3号】** ・ (3月号)

- ・ **菊池正士「原子核物理50年の回顧」**

- ・ 〔1. 緒言 2. ラジウムの発見（1898） 3. ラザフォードの Successive transformation の理論（1903） 4. ソディの同位体の発見 5. 原子核の発見（1908） 6. ボアの原子模型（1913） 原子構造の確立 7. 同位体と原子核構造 8. ラザフォードの $\alpha$ 粒子による原子核壊変の実験（1919） 9. 中性子の発見 10. コッククロフト・ワルトンの実験（1932） 11. ジョリオ・キュリーの人工放射性原子の発見（1934） 12. サイクロトロン の発見と1930年代後半より1940年代初期の核物理 13. 原子核 のスピンに関する実験 14. 宇宙線研究の発展 15. 理論の発展 〈湯川の理論など〉 16. 戦後の大勢と今後の物理学 〕

- ・ **【第4号】** ・ (4月号)

- ・〔座談会〕・「中間子理論研究の回顧」
  - 〔坂田昌一・小林稔・武谷三男・富山小太郎・谷川安孝・中村誠太郎・井上健〕
- ・〔1. 京都大学でのスタート 2. 原子核理論の曙光 3. 湯川理論の前身 4. 湯川理論の確立 5. 大阪の雰囲気 6. 中間子の発見 7. 量子化の展開 8. 第4論文の前後 9. 京大への転任とソルヴェー会議 10. 2中間子論 11. 中間子討論会の終末——超多時間理論の展開—— 12. 素粒子研究の将来 13. 回顧と展望〕
- ・〔第5号〕・（5月号）
  - ・〔巻頭言〕「科学教育の動向」（玉蟲文一）
  - ・「アメリカにおける一般教育の動向は、現在、わが国の新制大学の教育に直接的に影響を及ぼしている。」
- ・〔第9号〕・（9月号）
  - ・〔巻頭言〕「学術会議のこと」〔S.I.=彌永昌吉〕
  - ・「新会員による学術会議は、進歩的で民主的な真摯な科学者の集まりであって、真に学会の総意を代表し、従って政府にたいしても力強い発言のできるようなものでありたいものである。」
- ・〔第10号〕・（10月号）
  - ・〔湯川秀樹・ノーベル物理学賞講演〕
    - ・湯川秀樹・「発展途上における中間子論」
      - ・「中間子論はこの15年間の間に非常に大きな変遷をなした。それにも拘わらずなお多くの問題が未解決のまま残されている。」
      - ・〔訳註：中村誠太郎・福田博・山口嘉夫〕
- ・〔第11号〕・（11月号）
  - ・〔新刊書〕湯浅光朝『科学文化史年表』（中央公論社刊）

.....

・【昭和25年〔第5巻〕の『自然』】▼

・【第1号】・（1月号）〔80頁、80円〕

・【コラム】・「日本学術会議の声明」

・「 声明

日本学術会議は最近の事態に鑑み、次の声明を行う。

大学等学術研究機関の人事については、学問思想の自由を尊重することを念とすべきであって、単に政党所属等を事実上の理由として、処置さるべきではない。

また大学においては、学問の研究に関連する、教授会の権限が尊重せらるべきであって、これが外部よりする政治的理由によって、左右されてはならない。

右、声明する。

昭和24年10月6日 日本学術会議

.....

・「 声明

日本学術会議は平和を熱愛するものである。

原子爆弾の被害を目撃したわれわれ科学者は、国際情勢の現状にかんがみ、原子力に対する有効なる国際管理の確立を要請する。

昭和24年10月6日 日本学術会議

.....

・【コラム】・「湯川秀樹博士にノーベル賞」

・「1935年、原子核内に働く核力を説明するため中間子を仮設してその性質を予言し、以後の素粒子論の展開に顕著な業績をあげたことについて授賞された。湯川博士により端緒を開かれた中間子論が、多くの優秀な研究者を得て、二中間子論、中性中間子論など、諸外国に先行的に発展しつつあることは力強いことである。」

.....

- ・ [第2号] ・ (2月号) [72頁、70円]
- ・ 仁科芳雄「国際学術会議への旅」〔於、デンマーク〕
- ・ [第4号] ・ (4月号) [80頁、80円]
- ・ 湯川秀樹「旅のノートから」〔巻頭コラム〕
  - ・ [ストックホルムからコペンハーゲン、パリ、ロンドンへ]
  - ・ 「霧こめしパリーの宿に帰りきて旅の愁はややに深しも」
- ・ 金関義則「素粒子論グループ」
  - ・ 第1表 素粒子論研究の陣容 (1950年1月)
  - ・ 第2表 素粒子論グループの系譜
  - ・ 第3表 理化学研究所の原子学研究室 (1942年)
- .....
- ・ [第8号] ・ (8月号) [96頁、100円]
- ・ 湯川秀樹「中間子論の模型と方法」〔佐々木宗雄訳註〕
- ・ 特集「水素爆弾と平和」
  - ・ アインシュタイン「水素爆弾と平和」
    - ・ 「国家の武装を通じて安全保障を達成するという考えは、現在の軍事技術の段階では破滅的な幻想であります。」
- ・ [第9号] ・ (9月号) [80頁、80円]
- ・ 湯浅光朝『科学文化史年表』発刊に際して
  - ・ 「科学史の最高の意義は、社会科学の建設に豊かな基盤を提供し、社会進化の運動学的法則発見のよい手段を与えるところにあるといわねばならない。」〔太字は原文によるもの〕
- ・ [第11号] ・ (11月号) [80頁、80円]
- ・ 湯川秀樹「若い人々へ」〔京都大学での講演〕
- ・ 随筆「水爆と原爆」 (中谷宇吉郎)
  - ・ 「今度の水素爆弾の製造が、どの程度速かに完成されるかは、アメリカの科学者たちの心からの協力の度如何によるであろう。科学の研



究というものは、結局人間の精神力によって成就されるもので、金と力だけで成し遂げられるものではない。」

「原子爆弾の完成を一番喜んだのは、これを作ったアメリカの科学者たちであるが、その悲哀を一番痛切に感じているのも彼等である。」

・ [第12号] ・ (12月号) [80頁、80円]

・ **江上不二夫**「**真実の人を選べ**——日本学術会議第2回会員選挙を前にして——」

.....

\* 1950年ノーベル物理学賞：パウエル（英）「写真撮影による原子核崩壊過程の研究方法の開発および中間子の発見」

\* 1月、H・ノーマン『**忘れられた思想家—安藤昌益のこと**』  
(大窪愿二訳、岩波新書)

\* 4月、**小倉金之助**『**数学者の回想**』（河出書房刊）

\* 6月、朝鮮戦争はじまる。

\* 7月、金閣寺全焼。警察予備隊創設。総評結成。

\* 9月、**渡辺一夫**『**フランスルネサンス断章**』（岩波新書）刊

・ [1952年、**高校生の大江健三郎**はこの本を読み、東京大学への進学を決意した。]

\* 12月、長岡半太郎没。

.....

.....

・ **【1951年（昭和26年）】**

.....

・ 1月、仁科芳雄、死去。

・ 3月、湯川秀樹・坂田昌一・武谷三男『**真理の場に立ちて**』

(毎日新聞社刊)

- ・〔湯川秀樹「回顧と展望」、坂田昌一「中間子理論研究の回顧」、  
武谷三男「素粒子論グループの形成—私の目を見た—」〕

.....

- ・【昭和26年〔第21巻〕の『科学』】▼

- ・【第1号】・（1月号）

- ・〔話題〕朝永振一郎・〔プリンストン研究所の学風など〕
- ・〔時事〕「日本学術会議第2回会員」〔「第4部」（理学）〕
- ・「全国区」：伏見康治・茅誠司・坂田昌一・仁科芳雄ら
- ・「地方区」：山田光雄・藤岡由夫ら

- ・【第4号】・（4月号）　・【20周年記念号】

- ・「“科学”創刊20周年に当って」〔以下は、一部分〕

- ・富山小太郎：昔の“科学”と今の“科学”

- ・「石原先生は・・・科学の方法論などにも深い関心を示していられた。  
・・・本誌にもその傾向がはっきり反映していた。・・・物理学界の巨星の論文やら講演などの紹介や翻訳などが盛んに本誌を賑わしていた。これが当時の“科学”の特徴の一つになっていたと思う。」

- ・湯川秀樹：物理学の20年・・・〔『しばしの幸』：文献⑩に収録〕

- ・「日本は科学における後進国であるにもかかわらず長岡半太郎先生のような先駆者を出した。また仁科芳雄先生のようなすぐれた指導者を持ち得た。」〔ニューヨークより〕

- ・坂田昌一：20年を回顧して・・・〔「論集」：文献《F》《G》に未収録〕

- ・「中間子理論の提唱と超多時間理論の展開はもっとも大きな成果として世界に誇ることができよう。」

.....

- ・〔仁科芳雄博士追悼文ほか〕

- ・朝永振一郎「仁科先生」

- ・「先生はわれわれの間に物理学研究の近代的な方法に対する自覚をもたらされた。」
- ・ **玉木英彦「科学研究所と仁科芳雄」**
  - ・「仁科先生は戦後の日本にとって得がたい国際人であった。」
- ・「故仁科芳雄博士年譜」
- ・「“科学”20年のあゆみ」（編集部：稲沼瑞穂）
  - ・ . . . . .
- ・ [第8号] ・ (8月号)
  - ・ 湯川秀樹「中間子研究の近況」〔ニューヨークより〕
    - ・ . . . . .
- ・ 【昭和26年〔第6巻〕の『自然』】 ▼
  - ・ [第1号] ・ (1月号)「特大号」〔96頁、95円〕
    - ・ **ニールス・ボーア「国際連合への公開状」**
      - ・「科学と技術の発展が人類の幸福増進という輝かしい約束を保證すると同時に、恐るべき破壊の方法が人類の手に落ちて、文明全体が極めて重大な挑戦状をつきつけられるに到っている。」
      - ・〔国連原子委員会の管理機構設置の無期限延期という状況の中での発言〕「人類の理性と善意に解決を求めようとするのがボーア博士の真意である。」〔「編集後記」より〕
  - ・〔座談会〕・「朝永先生大いに語る」
    - ・ 朝永振一郎・田地隆夫・福田信之
  - ・「湯川祭てんやわんや」(P.Q.R)
    - ・「湯川記念館の建設計画など」
- ・ [第3号] ・ (3月号)〔80頁、90円〕
  - ・「日本学術会議第2回選挙批判」(伊達次郎)
- ・ [第4号] ・ (4月号)〔88頁、100円〕
  - ・【仁科芳雄博士追悼特集】

- ・“働きて 働きて病む 秋の暮”〔仁科芳雄：口述〕
- ・湯川秀樹「仁科芳雄先生の思い出」〔ニューヨークにて〕
- ・〔座談会〕「仁科先生を偲んで」
  - ・〔朝永振一郎・山崎文男・竹内証・坂田昌一・中山弘美・玉木英彦〕
- ・〔追悼文〕
  - ・こわかった「親方」（小林稔）      ・宇宙線と「親方」（関戸彌太郎）
  - ・時代の子か（伏見康治）      ・仁科博士学術論文目録
  - ・仁科先生の御病歴（武見太郎）      ・略歴
  - ・ジャーナリズムの片隅で（金関義則）      ・先生と私（小倉真美）
- .....
- ・〔第5号〕・（5月号）「満5周年記念特大号」〔106頁、120円〕
- ・「日本学術会議第9回総会から」（松浦一）
  - ・〔科学者の生活保障の問題、再軍備反対声明をめぐって、学問・思想自由委員会から〕
- ・坂田昌一「湯川理論展開の径路（Ⅱ）
  - 1940年より戦争終結まで——」
  - ・〔6. 中性中間子の研究      7. 二中間子仮説の登場  
「湯川理論年表（1928～1945）」      〕
- .....
- \* 1951年ノーベル物理学賞：コッククロフト、ウォルトン（英）
  - 「荷電粒子に対する高圧加速装置の考案とそれによる元素変換  
の先駆的研究」
- \* 5月、用紙統制〔新聞など〕撤廃
- \* 6月、林芙美子没
- \* 9月、対日講和条約調印
- \* 11月、第1回教研集会（日教祖）

.....

.....

・【1952年（昭和27年）】

.....

・8月、朝永振一郎・玉木英彦編『仁科芳雄——伝記と回想』  
〔みすず書房刊〕

・湯川秀樹「仁科芳雄先生の思い出」（1951年2月1日、  
ニューヨークにて）〔「自然」昭和26年4月号〕

・〔湯川『しばしの幸』、昭和29年、読売新聞社刊に収録〕

.....

・【昭和27年〔第22巻〕の『科学』】▼

・【第9号】・（9月号）

・〔話題〕「原子力研究に進め」（菊池正士）

・「世界は原子力時代に向って急テンポにばく進んでゆくのにもかわ  
らず、わが国では大多数の人が無関心のようなのである。」

・【第11号】・（11月号）

・〔話題〕「湯川記念館」（朝永振一郎）

・〔全国の研究者による利用（共同研究）、所員の流動性（短期で変更）  
など、アメリカのプリンストン研究所をモデルとしたもの。〕

.....

・【昭和27年〔第7巻〕の『自然』】▼

・【第1号】・（1月号）〔80頁、105円〕

・「岐路に立つ日本学術体制

——日本学術会議第11回総会を終えて——」（新村猛）

・「日本学術会議はげんざい多くの問題や懸案や困難をかかえている。  
例えば、科学研究費配分の基準と方法、会員選挙規則の改正、学士

院会員の選定方法、各部内専門区分の再検討、委員会の整理、委員会と運営審議会との関係、等々思いつくままに挙げても数が少ない。」

- ・〔このような問題点は、現代の日本学術会議にも存在しているであろう。そもそも完璧な組織などはないからである。〕

・ [第5号] ・ (5月号) [80頁、105円]

・ 「素粒子論の展開 (I) ——中間子をめぐって——」 (梅澤博臣)

- ・ [1. 素粒子像の開拓者としての中間子場 2. 素粒子論とは  
3. 素粒子像の問題提起 ]

・ [第7号] ・ (7月号) [80頁、105円]

・ 「日本学術会議第12回総会を顧みて」 (北川敏男)

・ 「学問を守るために」 (松浦一) [北海道大学植物学教室]

- ・ [学問の自由を守れ 大学の自治を確立せよ 学界の民主化を計  
れ 学術体制を刷新せよ 科学を戦争に使うな—再軍備反対  
むすび ]

・ [第8号] ・ (8月号) [80頁、105円]

・ 「素粒子論の展開 (II) ——中間子をめぐって——」 (梅澤博臣)

- ・ [4. 中間子論の誕生 5. 豊富な素粒子 6. 自己場の問題と  
その現実性——くりこみ理論の展開 ]

・ [第9号] ・ (9月号) [80頁、105円]

・ 「湯川記念館—経緯と現状—」 (小林稔)

・ [第10号] ・ (10月号) [80頁、105円]

・ 湯川秀樹「素粒子論の現状と将来」 [米、コロンビア大学教授]

- ・ [素粒子論の誕生と成長 素粒子論の矛盾——発散の困難と  
くりこみ理論 質量スペクトルの問題へ 将来の方向と実験の  
進歩 新しい飛躍は若い人の手で ]

・ 「学問の危機」 (松浦一) [北海道大学植物学教室]

- ・〔破壊活動防止法案の通過、学問・思想の自由保障委員会の委員の一人として・・・〕

.....

\* 1952年ノーベル物理学賞：ブロッホ、パーセル（米）「核磁気の精密な測定法の開発」

\* 5月、血のメーデー事件

\* 7月、破防法公布施行。公安調査庁発足。

\* 11月、玉蟲文一『科学と一般教育』（岩波新書）

\* 12月、田中館愛橋没。

.....

.....

・【1953年（昭和28年）】

.....

・〈湯川秀樹、46歳〉・7月、帰国、復職。

8月、基礎物理学研究所（湯川記念館）所長を併任。

9月、基礎物理学研究所（湯川記念館）所長となり、理学部

兼務となる。〔定年まで〕〔10月、坂田昌一：基礎物理学研究所運営委員会委員となる。没年まで。〕

・11月、『岩波 理化学辞典』（岩波書店刊）

・〔編集：井上敏・小谷正雄・玉蟲文一・富山小太郎〕

・〔「岩波」の文字が書名に入った最初の版。〕

.....

・【昭和28年〔第23巻〕の『科学』】▼

・【第1号】・（1月号）

- ・〔座談会〕・「日本の原子核・原子力研究のあり方」
- ・〔菊池正士・坂田昌一・武谷三男・朝永振一郎・井上健・  
武田栄一・藤本陽一・伏見康治（司会）富山小太郎〕
- ・〔原子核研究のバック 日本の原子核装置と実験家 工業レベルの  
低さと原子核研究 日本でやるべきテーマ パイル〔原子炉〕の問題  
原子核・原子力と研究体制 〕
- ・〔第6号〕・（6月号）
- ・杉本朝雄〔科学研究所〕「サイクロトロン再建」
  - ・〔サイクロトロンの破壊 占領期間中の原子核の実験研究  
サイクロトロン再建の動き 科研のサイクロトロン 再建  
サイクロトロンの活用〕
- ・〔第7号〕・（7月号）
- ・湯浅年子「フランスの原子力研究と原子核研究」
  - ・〔原子力研究 原子核物理学の現況〕
- ・〔第10号〕・（10月号）
- ・【国際理論物理学会議開催記念】
- ・「特集：今日の理論物理学——その成果と発展」
- ・〔巻頭言〕「国際理論物理学会議の開催によせて」〔K.T. = 富山小太郎〕
- ・湯川秀樹「理論物理学の将来」
- ・ハイゼンベルク「原子核研究を推進するためのヨーロッパの協力」
- ・「理論物理学の中心問題」
  - ・ワイスコフ「原子核構造と核力」（佐々木宗雄訳）
  - ・ファインマン「基礎物理学の現況」（堀江久訳）
- ・「理論物理学の展望」
  - ・〔座談会〕・「素粒子論の進む道」
  - ・〔朝永振一郎・武谷三男・福田信之・福田博・堀江久・富山小太郎〕
  - ・〔今日までの素粒子論 原子核の問題 宇宙線の問題 中間子論



## の問題 日本の素粒子論)

.....

- ・【昭和28年〔第8巻〕の『自然』】▼
  - ・【第1号】・（1月号）〔96頁、120円〕
    - ・〔巻頭〕湯川秀樹「科学の進歩と国際協力」
    - ・【原子力問題・特集】
      - ・〔座談会〕「“日本原子力委員会”をめぐって」
        - ・〔伏見康治・早川幸男・須田正己・片山謙二〕
      - ・坂田昌一「原子力問題と取り組む—学術会議第13回総会より—」
        - ・〔1. 仁科博士の態度 2. 講和条約と原子力研究の自由 3. 茅・伏見提案が行われるまで 4. 原子力の研究は開始すべきか 5. むすび〕
      - ・「原子力問題に関する討論——学術会議第13回総会における——」
        - ・〔茅誠司・坂田昌一・伏見康治・我妻栄ほか〕
  - ・【第3号】・（3月号）〔80頁、100円〕
    - ・「国際理論物理学会議への期待」
      - ・小谷正雄〔会議の輪郭 コペンハーゲンの思い出  
今回の会議の特色 素粒子と物性〕
      - ・早川幸男〔国際学会に対する準備 素粒子論における準備〕
  - ・【第8号】・（8月号）〔82頁、100円〕
    - ・「現代物理学の課題」〔I 場の理論（高橋康） II 原子核・宇宙線の理論（久世寛信） III 物性論（中島貞雄・大澤文夫）〕
  - ・【第10号】・（10月号）〔82頁、100円〕
    - ・「国際理論物理学会議に来朝の学者たち」
      - ・〔ファインマン、スレーター、オッペンハイマーなど〕
  - ・【第11号】・（11月号）〔82頁、100円〕
    - ・湯川秀樹「素粒子の統一的理論への試み」

・〔序論 素粒子の概念の再検討 混合場の理論 非局所

相互作用をする局所場 非局所場 原著者註〕

・〔中村誠太郎・岡林孝彦訳註〕

・〔第12号〕・（12月号）〔82頁、100円〕

・「国際理論物理学会の収穫（I）」

・〔「宇宙線とV粒子」（早川幸男） ・「場の理論B」（須浦寛）

・「原子核の殻構造及びベータ崩壊」（梅澤寛）〕

.....

\* 1953年ノーベル物理学賞：ゼルニケ（オランダ）「位相差顕微鏡の研究」

\* 2月、NHKが**テレビ放送**を開始した。

\* 6月、「世界大思想全集」刊行開始（河出書房）

\* 7月、東大原子核研究所の敷地、田無町に決定。

\* 7月、**朝鮮戦争休戦協定**の調印。

\* 9月、「現代日本文学全集」〔全99巻〕刊行開始（筑摩書房）

\* 12月、イギリスの**エリザベス女王戴冠式**に皇太子が出席。

.....

.....

◎ 「 以下、次号につづく」・・「その三」へ

.....

---

「PHN（思想・人間・自然）」 第53号

〔2023年2月25日脱稿、和田耕作（C）〕

〔2023年3月1日発行、PHNの会、無断転載厳禁〕

---